

2012年10月12日 1F（福島県双葉町、大熊町） 報道関係者に公開

東京から約220 kmの「J ヴィレッジ」で装備
J ヴィレッジの放射線量：2 $\mu\text{Sv/h}$

09:50 20 km 離れた1Fに出発

1Fに近づくにつれて放射線量は高まり、
6 $\mu\text{Sv/h}$ に上がると一般マスクを全面マスクに
変えて着用

10:21 1F正門に到着 放射線量：7.5 $\mu\text{Sv/h}$

報道関係者45人がバスで免震重要棟を出発
約3時間半かけて構内を取材

1～4号機の海側を通った後、山側に回る
初めて公開された1、2号機の山側付近を回る
4号機の山側と工事中の新しい汚染水処理施設前
の2ヶ所（放射線量：95～200 $\mu\text{Sv/h}$ ）で降車し、計25分間、車外取材

報道関係者の累積被曝量は52～58 μSv

取材ルートと原発施設の配置



2号機の側 : 100 $\mu\text{Sv/h}$
3号機の周辺 : 300 $\mu\text{Sv/h}$
4号機に接近 : 1000 $\mu\text{Sv/h}$



1Fの到着前、全面マスクを装着する報道関係者＝10：10



原子炉を冷やすための水が入るバッファタンク（左）
炉注水ポンプは右奥の車両の先にあるが見えない＝10：37



4号機タービン建屋の海側、押しつぶされたタンクがそのままに＝10：40
今回のルートで、最も放射線量が高いのは4号機タービン建屋の海側。この付近では1000 $\mu\text{Sv/h}$ を計測
この付近には津波で横転したとみられる車両がひっくり返っているなど、瓦礫や残骸が放置されていた



4号機タービン建屋の海側に残る津波で横転した車両＝10：41



4号機の南側にある廃棄物処理建屋に残る津波の爪痕＝10：42



クレーンを使って瓦礫除去作業中の 4 号機原子炉建屋＝10：46

4 号機前の降車は 10 分に制限。地面に置かれた格納容器の黄色い上蓋に約 15 メートルまで近づいた直径約 9 メートル、重さ約 52 トン。工事を進めやすくするため 8 月 10 日に原子炉建屋から撤去した



クレーンを使って瓦礫除去作業中の 4 号機の原子炉建屋＝10：50



クレーンを使って瓦礫除去作業中の 4 号機の原子炉建屋=10 : 47



クレーンを使って瓦礫除去作業中の4号機の原子炉建屋＝10：56
230 $\mu\text{Sv/h}$ を超える線量を計測

初めて公開した1、2号機の山側は壊れかけた建物など障害物が多い。昨年8月に、1、2号機主排気筒の地面近くにある配管の表面で10 Sv (10000 mSv) /h を計測したが、今回、その排気筒から15メートルほど離れた道路の線量は、1万分の1以下の0.8 mSv (800 μSv) /h 1時間浴びると命の危険がある線量の高さだ。バスは十数メートルまで近づいたが、線量はそれほど上がらなかった。東電担当者は「場所が少しずれるだけで線量は大きく変化する」という



1・2号機の原子炉建屋の間で作業する作業員。左の主排気筒の根元付近で昨年8月、10 Sv/h 検出＝11：10



主排気筒の根元付近（中央）では昨年 8 月、10 Sv/h の高い放射線を検出＝11：10
1号機建屋と2号機建屋の間には「立ち入り禁止」の表示板が見えた



9月の鉄骨落下事故で、瓦礫撤去が中断している3号機（左）と4号機の原子炉建屋＝11：10



建設が進む「多核種除去設備」 = 11 : 16

坂を西に向かって上がった広い敷地で、新しい汚染水処理システム「多核種除去装置」が最終調整中
近く試験的に汚染水を流す。従来システムでは難しかった放射性物質ストロンチウムの除去が可能になる



建設が進む「多核種除去設備」 = 11 : 22



乾式キャスク仮保管庫の建設工事現場＝11：44
敷地内にある燃料保管の共用プールは近く満杯になる
空気で冷やす乾式の仮保管庫を建設し一部を移す計画で、基礎工事が始まった



窓を鉛で覆った免震重要棟で取材に応じる高橋毅福島第1原発所長（55）＝12：55
「作業員の安全確保を優先して慎重に作業しているため、進度が遅い。ロボットの投入を考えている」

◇ゴーストタウンと化した原発周辺、韓国報道機関などに福島を公開

日本の福島県大熊町は「顔のない町」だ。福島第1原子力発電所が位置するこの町の原発作業員たちは、高い放射線量のために全面マスクを取ることができない。町の周囲には人は見あたらない。飼い主を失った牛が、時々作業員の夜間通行の脅威となる。一般人の立ち入りが統制された福島原発に12日、韓国の報道機関が入った。

「ゴーストタウン」と化した原発周辺

午前8時、福島原発から西に20キロ離れたJヴィレッジ。日本のサッカー代表チームの訓練施設だったここは、原発事故の後、復旧作業の前進基地となった。ここの放射線量は1時間あたり2マイクロシーベルト（以下すべて1時間あたり）。ソウルが0.11マイクロシーベルト、東京が0.047マイクロシーベルトなので、かなり高い。しかし、1回のCTの放射線被曝量（8000マイクロシーベルト）よりはるかに低い数値だ。韓国の報道機関や英ロイター通信など取材陣45人は、防護服を着て、手袋（3重）、足を覆う布（2重）、頭巾帽、マスクを着用した。午前9時50分、原発に出発した。原発から半径10キロから20キロ圏内は一般人の立ち入りが許可されている。しかし、人の姿はなかった。建物は地震で倒れた状態のままだった。1年7ヵ月以上作付けができなかった田畑には、セイタカアワダチソウという見慣れない黄色の雑草がいっぱいに生えていた。それこそ「ゴーストタウン」だった。原発に近づくほど、携帯用の測定計の放射線量は高くなった。6マイクロシーベルトに上がった時は一般マスクではなく全面マスクを着用した。原発の正門では7.5マイクロシーベルトまで上がった。

原発内部は「悲惨」

取材陣を乗せたバスが海側に向かうと、原子炉1~4号機が姿を現した。屋根に超大型テントを覆った1号機の外見は問題なさそうだったが、出入口のフェンスはまがっていた。2号機のそばには横転した車そのまま放置されていた。放射線量の数値が100マイクロシーベルトに急激に上がった。

1、2号機の間には「接近禁止」の表示があった。東京電力の職員は、「昨年8月から9月に、10シーベルト（1000万マイクロシーベルト）が測定された場所だ。その時以降近づいていないので、現在の数値は分からない」と話した。一般人が1時間に10シーベルトの放射線量を浴びると死亡する。

4号機に近づくと、放射線量は1000マイクロシーベルトに上がった。東京電力関係者は、「昨年汚染された建物の残骸についている放射性物質のためだ。風向きによって特定の場所の放射線量の数値が非常に高くなる」と話した。別の関係者は、「昨年の大地震と水素爆発で、1~3号機の格納容器が損傷した。格納容器に近づくほど、放射線量が高くなる」と説明した。

取材陣は、1時間あたりの放射線量が95~200マイクロシーベルトの場所を選んで車の外に出た。取材時間は10分。水素爆発で屋根が吹き飛んだ4号機の建物の壁には所々穴があいていて、鉄骨が出ていた。来年末から、建物上部の使用済燃料貯蔵プールに保管されている燃料棒を取り出す計画だ。

しかし、全般的な作業の進捗は遅い。1年7ヵ月が経過したが、依然として建物の残骸だらけだ。原発の中には、コンクリートと金属の残骸が4万9000立法メートル、木材などが7万1000立法メートル散らばっているという。福島第1原発高橋毅所長（55）は、「作業員の安全確保を優先して慎重に作業しているため、進捗が遅い。ロボットの投入を考えている」と話した。

全般的な危険度は減少

昨年一時40万マイクロシーベルトまで検出された福島原発周辺の放射線量は、12日、原発のそばでも1000マイクロシーベルトだった。1000マイクロシーベルトは、一般人が1年間人工的に被曝する放射線量許容値と同じ水準だ。1時間で年間被曝量を浴びれば、健康に影響を与えることはあるが、致命的ではない。

KAIST原子力・量子工学科の張舜興（チャン・スンフン）教授（韓国原子力学会長）は、「福島原発付近を除いては、放射線量が人体に影響を及ぼさない水準に下がった」とし、「特に原発から200キロほど離れた東京は安全と言える」と話した。全体的に「放射能の恐怖」はかなり減少した。